

文学を生む力（１）

人間学科共通科目「人間学」特別講演

文学を生む力

宮 本 輝

日時：2012年6月7日（木）午前9時

会場：S201・S202 教室

〔講演〕

みなさん、おはようございます。

必修科目が朝の一時間目というのは、ほんとに嫌な時間に講演する羽目になりました（笑）。私は大学生の時に、一時間目の授業にはほとんど出たことがありませんでした。今日はその時の罰が当たっているのかなと思います（笑）。一時間目の朝九時からで、しかも大教室だと聞いて、教室の三分の一も埋まればいいほうだろうと思っていたのですが、こんなにたくさんの学生さんにお越しいただいて、ありがとうございます。

私は学者ではありませんし、評論家でもありません。毎日ひたすら実際に小説を書いている人間です。ですから、小説というのはどうやって生まれるのか、そして、それを完結させるために、小説家という人間の内部ではどんなことが起こっているのか。今までに短編から長編までいろいろな小説を書いてきましたが、今日はその中でもとりわけ長い小説を一つ例に挙げて、それが出来上がっていく行程というのを皆さんに正直にお話ししようと思います。

別に小説家になるつもりはないんだから、小説の書き方なんか教えてもら

(2)

わなくて結構だよ、という方もいるでしょう。この中からは、科学者や医者が出るかもしれない。あるいは全く違った分野で活躍する人も出るでしょう。ひょっとしたら小説家も出るかもしれません。しかし、将来何になるか、ならないか、ということと関係なく、この話の中に、皆さんの将来の人生にとって多少なりとも何か役立つことがあるのではないかと思います。

スタンフォード大学の2005年度の卒業式でアップルの創始者スティーブ・ジョブズ氏が卒業記念スピーチを行いました。その中で「コネクティング・ドッツ」(connecting the dots)という言葉で、彼は使いましたⁱ。これは「点と点をつなげる」という意味です。まず、そのことからお話ししていきたいと思います。

そして、一人の小説家が一つの小説を書き上げるのに、どれほどの悪戦苦闘をするかという話の中から、この「コネクティング・ドッツ」、つまり「点」と「点」をつなげるということの意味、そしてそれが人生をいかに生きるかに相対していくということを、皆さんに感じ取っていただけたらと思っています。

小説を書き始めるまでの苦悩

私の最も長い小説は「流転の海」ⁱⁱというシリーズです。34歳の時に書き始めて、現在、その第7部「満月の夜」を『新潮』に連載中です。既に5000枚ぐらい書いておりまして、読む方も大変でしょうが、書く私も大変です(笑)。これはまだ完結しておりませんので、既に完結した長編小説で、何かいい題材はないかと考えました。それで、最近の作品で「骸骨ビル」ⁱⁱⁱというのがありまして、この小説がどうやって生まれたのかというお話をさせていただきますことにします。

『群像』という有名な文芸誌から、十年以上も以前より「宮本さん、いつか群像で連載やってくれ」と言われてきました。『群像』は純文学誌ですが、思想的に私とかみ合わないなあと感じる書き手が多かったものですから、「そ

のうち書くよ」なんて言いながら敬遠しておりました。しかし、『群像』のある編集者が何回も何回も通ってくださり、そのうちその方との間に信頼関係が生まれてきます。それで、彼が講談社で現役の編集者でいるあいだに、彼のために書こうという気になり、とうとう承諾しました。それがもう8年ぐらい前になります。ですから、どんな仕事も人間と人間とのつながりなんですね。

連載開始はその3年後の新年号からということでした。ですから、引き受けたときはまだ3年もあるという余裕がありました。そのうち何か、いい小説の題材を思いつくだろうと高をくくっておりました。人間がちょっといい加減なものですから（笑）。だいたいいい加減な人間でないと37年も小説家をやってられないんですが（笑）。しかし、あっという間に1年が過ぎ、2年が過ぎました。それでもまだ来年だと思っている。そうしているうちにあと半年になり、3ヶ月になりました。その頃になると、ちょっとずつお尻に火がついてきます。せめて題だけでも決めなければと。ところが、題名も内容も、何も思い浮かびません。しかし、時間だけはどんどん経っていきます。

編集者からいよいよ電話がかかってきました。「お忘れではございませんでしょうが、今度の新年号からいよいよ連載が始まります。第一回目は原稿用紙何枚ちょうどできますでしょうか」と。言葉は大変慇懃なのですが、私には「ナニワ金融道」の追い込み^{iv}みたいに思えてきます（笑）。それでも何も浮かびません。そうなるともう布団に入っている、他の小説を読んでいる、音楽を聴いている、常に深層心理ではどんな小説を書こう、どういうふうにしようと思って、頭が変になってきます。もともとちょっと変なんです（笑）。それがはっきりと変になってくる。そうすると次に来るのは恐怖心です。「もう俺、国外に逃げなくちゃいけないんじゃないか」とか、「講談社だけ火事で焼けへんかな」とか（笑）。親しい小説家も言っていました。「ホント俺、出版社にダイナマイト放り込んでやろうと思うときだってあるんだよ」と。自分が悪いくせにね（爆笑）。

そんなふうに、どんな小説にしようか、どんな題をつけようかと、考えて、

(4)

考えて、考えて、考えて、それでも何も浮かばない、困ったなあというときに、「待てよ、落ち着け」と自分に言い聞かせるんです。「自分はどんな小説を人に読ませたいのか」と。そうするとこれは結局のところ、「どんな小説を自分が読みたいのか」というところへ入っていくのです。

そうしていったときに今度は、私という人間の内部にある哲学に育まれたものだとか、生まれてから今日まで見てきた風景だとか、人間の一瞬の表情だとか、様々な人々の裏切りだとかがポコッと出てきます。

65歳にもなりますと、今まで様々な人間と出会ってきています。子どもの時分にもいろいろな経験をしました。これらは全部、「点」です。さきほどのコネクティング・ドッツのドット(dot)です。この「点」とこの「点」とは、それが起こったときは何の関係ありません。これとこれがつながるなんて考えもしません。ところが、小説が書けなくてそこまで追い詰められたときに、火事場の馬鹿力と言うのか、自分の心の中からも消え去っていたはずの「点」がポコッと出てくるのです。これが一個出たら、もうしめたものです。さて、この「点」をどうやって出すのか。こればかりはお教えることができません。企業秘密だという意味ではありません。教えようがないのです。

物語の核が出来る瞬間

例えば、7,8歳の子どもの時分に、だれも住んでいないボロボロの一軒のビルディングを見たと。そこにはおじいさんが一人で住んでいた、というようなことがポツンと出てきて、そこから物語が生まれていきます。「骸骨ビルの庭」の場合がまさにそうでした。

私がまだ幼稚園ぐらいのときのことです。大阪の土佐堀川沿いに空襲を危うく免れた、当時としてはとても珍しい三階建てのビルディングが建っていました。当時、大阪の街ではビルというものがまだまだ珍しい時代で、三階建てのビルよりも大きいのは阪急百貨店ぐらいでした。しかもほとんどが空

襲でやられましたので、奇跡的に残ったビルでした。当時、父は商売に失敗したことをきっかけに、このビルの2階を借りて中華料理屋を始めました。1階が雀荘、2階が中華料理屋、3階が私たち親子の住居。そういう生活が3、4年続きました。それが私にとっての一つの「点」です。その「点」がポコッと出たことで、「骸骨ビル」というアイデアが生まれたのです。

それはほとんどだれも住んでいない廃墟のようなビルでした。今みたいに夜が明るくなく、街路灯も100mおきに裸電球が一個だけ灯っているような時代でした。そんな暗い夜に遠くからそのビルを見ると、なんとなく骸骨みたいに見えました^v。それで「うちの家、骸骨みたいやなあ」と家族で話したものです。そのことがポコッと出てきたのです。よし、これを題材にしよう、と決めました。

しかしそれだけでは、まだこれだけです(笑)。変な日本語ですが(笑)。じゃあそこにどんな人間を住まわせるのか。年代はいつにするのか。そして、いったい“何”を小説に書いていくのかを考えたときに、また別の「点」がポコッと出てきます。どうやって出てくるかは、先ほども申した通り言えません。自然に出てくるとしか言えないのです。

ラテン語にシュポンターン (spontan) という言葉があります^{vi}。これは日本語にうまく訳せない言葉です。恣意的と訳すべきかと思えば、逆に恣意的ではないという意味の時もあって、どうもよくわからない。以前、ドイツに暮らす日本人の家に招待されたことがありまして、そのとき、彼の家で「シュポンターン」とはどういう意味かという話をしておりました。そうしたら、その横でたまたまテレビを見ながらその話を聞いていた、その家の高校生の息子さんが、「おじちゃん」と話に入ってきました。彼はドイツで生まれ育っている所以日本語よりドイツ語のほうが上手なのですが、その彼が「シュポンターンってね、何気なく、ふっと湧いて出るって意味だよ」と教えてくれたのです。「あ、それや、それや」と。ポコッと出てくるとはまさにそういうことです。この「点」と「点」の間に「シュポンターン」するのです。シュポンターンの意味はあとで調べてみてください。ラテン語起源ですが、ドイ

(6)

ッ語にも英語にもあります。それを一言で言える日本語はまだ見つかりません。

語り始める登場人物たち

話を戻しますと、まず、「骸骨ビル」がシュボンターンしたわけです。次はそこへどんな人物を配すかです。私はそこへ一人の人間を配しました。それは、戦後に南方の国から兵役を終えて帰国し、これから日本でどうやって生きていこうかと考えていた一人の青年です。そして、彼は親から譲り受けて持っていた大阪のビルで暮らすようになった。青年は当初、そのビルを売って得た金で今後の自分の人生を考えようと思っていたのだけれども、彼が帰ってくる前に、たくさんの戦争孤児、戦災孤児たち^{vii}がそのビルに住んでいた——というところから、物語を始めることにしました。

そうすると、だんだんといろんな「点」が湧いてきます。この子たちにとってその青年とはどんな親であったのかということを書こう、と。そしてそこに、人間を愛するとはどういうことか、人が育つということはどういうことなのか、教育とはどういうことなのか、父とか母とか子とかというものはいったいどういうものなのかと、いくつもの「点」がシュボンターンします。そしてさらに、一見、自分の力ではどうすることもできない、変えられそうにもない、非常に複雑微妙なこの社会の中にあって、彼らがどうやって自分たちの世界を築いていくのか——それを書こう、と。こんなふうに、あっちこっちからいろんな「点」がポッコポッコポコッとシュボンターンするのです。たいていの作家はたぶんそうだと思いますが、ただ表現の仕方が違うだけだと思います。

そうやって少しずつ少しずつ「点」が湧いていき、それがつながって薄ぼんやりとした小説の核が出来上がっていきます。しかしそれはまだ核です。ぼんやりとしています。何とか題をつけて書きだしますが、そのときには、最後がどうなるか、自分でもわかっていないのです。ただ編集者には、もう

ほとんど全部出来ましたとハタタリを言うのですけれども（笑）。

三島由紀夫さんは全く反対で、題も出来た、最初の出だしも出来ている、プロットも出来ている、次はこうなり、次はこうなり、最後はこうなる、というシノプシス（あらすじ）が全部もう出来ていて、それがこんな分厚いメモ帳にびっしりと書いてある。そうでないと、三島さんは一行も書き出せなかったそうです。私はかえってそういうのがあると書き出せないのです。「どうなるかわからんけど、いてまえー！」が私のやり方です（笑）。そうやって37年間、小説を書き続けてきました。

この段階で既にかんりの「点」と「点」が結ばれています。それで、さあ書き出します。まず「骸骨ビルの庭」と題を書きます。次に、「宮本輝」と名前を書いて、「第一章」と書きます。しかしそこから、しばらく三日ほどため息ばかりついています。「えらいもん書き出したなあ」と。「この小説をどんな小説にしようかな」と。そこから小説を作るという作業が始まっています。

最近では、私のように万年筆にインクをつけて原稿用紙に一字一字書く作家は、私よりも年齢が上の方は別として、ほとんどいなくなったそうです。今の方はみんなもうパソコンです。でもパソコンのキーを打つのも、万年筆で一字一字書くのも、一字は同じです。パソコンだからといって同時に十文字を打つことはできません。やはり一字一字打つしかないので。速いブラインドタッチでささっと打てる人でも、出てくるのは一字一字です。万年筆で書くのと同じなのです。

私は400字詰め原稿用紙に書きますが、5文字ぐらい書いて3時間ぐらい全く動かないときがあります。つまり、今から1000枚の長編を書こうという人間が出だしの5文字で詰まるわけです。そういうときに「どないしよう」と途方に暮れる絶望感というものを、ぜひ一度、想像だけしていただきたいと思います（笑）。目の前が暗くなって、ふと見上げた天井に丈夫そうな梁があったりしたら、「あそこにぶらさがったろかな」みたいな（笑）。冗談抜きでそこまで追い込まれるときがあります。これはすべて本当のことです。今日は

(8)

本当のことを正直にお話ししています。追い詰められてくると、心臓がどきどきしてきます。そして、万年筆を持つ手が震えてきて、手の汗でびしょびしょになります。だから横にティッシュかなにかを置いて拭きながら書きます。そういう日は何日も続くと焦ってきて、追い詰められて、「ちょっと精神安定剤でも飲もうかな、それともお酒にしようかな、両方飲んだらよう効くんちがうやろかな」なんて思うのです(笑)。

そういうときもあれば、原稿用紙で7枚ぐらい書いて、あれ今何時かなと思ったら、もう4時間も書いていたというような時もあります。もう6時間経っているというときもあります。そういうときというのは、別に大して考えてもないのに、次から次へといろいろな登場人物が出てきてしゃべってくれるのです。見も知らない人たちが出てきて、それぞれの人物がそのときそのとき勝手にしゃべります。それを書くだけですから、難なく書けます。実際は私自身が登場人物一人ひとりになっているのですが、そのときは自分がその人になっているとは思っていません。

何とかまず3枚書きます。3枚というのは長いものです。皆さん、一度3枚で小説を書いてみたらどうでしょうか。3枚でも立派な小説ができます。5枚ぐらいになってくると、ちょっと動き出したかなという気がしてきます。1000枚の中の5枚というはまだ厚みなんかなくてペラペラですが、それが重なって10枚になり、15枚になり、20枚になる。そして、30枚、40枚、50枚となる。その間にも絶えずこのコネクティング・ドッツ(点と点をつなげる)の「点」が、ポコポコと勝手に浮かんできます。そして、できあがっていきます。「勝手にできあがる」としか言いようがないのです。

これは絶対に国語の先生にはわからないことです。それから小説を評論する人たちにもわからないことです。実際に毎日小説を書いている人間にしかわからない一つの心理的生理状態だと思うのです。

私が書いた小説のある部分が大学や高校の入学試験の国語の問題に使われることが意外とよくあります。そういうときは事前に連絡してきません。事後承諾です。事前に知ってしまうと、私の親戚がもしその学校を受験すると

なったら教えてしまいますから（笑）。以前、私の書いた「泥の河」^{viii}がある高校の入学試験に使われて、事後に報告がありました。それで、自分が書いた作品ですから、絶対に解けると思って解いてみたのです。結果は、その「泥の河」が使われた問題が100点満点中70点を占めていたとしますと、私の得点は25点ぐらいでした（笑）。

もっと驚いたことがありました。ある名門国立大学の国語の入学試験に私の「螢川」^{ix}の一シーンが出ました。「傍線部分について作者はどのような意図でこのように描写をしたのか、それを30字以内で書け」と書いてあります。それはもう喜びました。これでぼくは名門大学に入れると（笑）。ところが、私の書いた「作者の意図」が不正解だったのです（笑）。「なんでやねん、作者、おれやぞ」と心の中で叫びました（爆笑）。そもそも30字で書けないから小説にしているのです。それを30字で書けと言う方が無理なのですが、それでも自分なりに一生懸命30字で書きました。時計を見ながら1字も越えないように、作者の意図を包み隠さず書いたのです。しかし、それが完全に間違いだと言うのです。私はそのとき、「国語」とはなんだろうと思いました。本当に電話して訴えてやろうかと（笑）。原作者が原作者の意図を書いてなぜ間違いなのか、誰が決めるんだと。そういう試験に受かって大学に合格した皆さん、おめでとうございます（笑）。創価大学は決してそんな試験問題は出さないでしょうけれども。それで創価大学に入学して、この一時間目に宮本輝の話を聴かなければならない皆さんは、災難というか、ご苦労様でございます（笑）。

一字一字を積み重ねて千枚へ

コネクティング・ドッツがだいぶ出てきました。そこでいちばん問題になってくるのが忍耐です。焦らないということです。一字一字積み重ねていくしかないということを肝に銘じることです。いっぺんに100字書けませんし、一日に100枚も書けません。しかし、1000枚の長編に臨んだ限りは、とにかく

く焦らないことです。まあ、命まで取ろうとは言わないだろう、考えていくうちに何とかなるだろうと、開き直るときが必ず来ます。

皆さん方もいつか世の中に出て、どこかの会社に就職して、「新車を今日5台売ってこい、おまえ、営業やろ？80軒の家で門前払い食らわされてこい」と言うような上司たちとの出会いが必ずあります。そのときにやってみせるか、辞めるのか。辞めるのは簡単です。「一日に新車5台売れなんて、そんなことできるか、会社辞めたる」と言って、辞めた人が大勢います。でもそこで、「よし、こうなったら、売ったらええのやろ。80軒断られてきてやる」と開き直るのです。それをやりながら「5台売ると、80軒断られるのと、どっちが早いやろか」とか、自分のなかで精神的なせめぎあいがあります。そのとき、今日の話思い出してください。原稿用紙で1000枚です。1000枚というのは分厚いです。それも一つの物語、しかも名作を書くのです。私、名作しか書いたことがないものですから（笑）。その名作を生み出すために、一人の小説家がどれほど苦勞しているか、ということ思い出してください。

どんな仕事でも、この小説を書くという作業と同じことです。例えば、このなかにひょっとしたら、学校を出て鍼灸マッサージに興味を持ち、マッサージ師になる方もいらっしゃるかもしれない。マッサージ師さんが一日に十人の人の体を揉んだらどれほど疲れると思いますか。その仕事が終わったら自分がマッサージしてもらわなければならないぐらい疲れます。それを毎日、毎日、やり続けることのすごさを考えてみてください。

焼き物でもそうです。普通の数茶碗かずちやわんと呼ばれる一個100円ぐらいで売っているような湯呑み茶碗を大量生産する職人さんは、粘土ろくろを轆轤ろくろに載せて回します。その人たちは電気の轆轤なんか使いません。電気代が高くつくからです。だから足で轆轤を回しながら、手で湯呑み茶碗を作ります。一日に何千個と回すのです。十日で何万個です。一年で何個になるのか。十年でいったいどれだけの数になるのでしょうか。

この人たちはいつか手が勝手に動くようになります。足も勝手に回ります。そして、回っている轆轤に指ですっと触れます。そのわずか3秒ほどで同じ

形の湯呑み茶碗を作るのです。その人の指はまるで魔法使いです。土も轆轤も何も見ていません。こういう一つの境地が必ず訪れます。それには少なくとも三十年かかると思います。だから私は「三十光年の星たち」^{*}という作品を書いたのです。必ずそういうときが来ます。そしてそのときに、いわゆる「点」と「点」がつながっていくのです。

作品を修正し完結させるまでの過程

そうやって一つの小説ができていきます。半分ぐらいできてくると、少しずつ先が見えてきます。よしこれで何とかなるかなというときに、大きな落とし穴みたいなものが訪れます。それは、時系列に大きな矛盾が出てくるのです。つまり、最初に出てきたのはAという男だったけれども、その人物が昭和何年に生まれて、あるいは平成何年に生まれて、いつ何をしてどうしたという設定と、あとから出てきた男の設定とが、その二人が出会ったときに時間的に全然合わなくなっているのです。これを何とか無理やり合わせようとしてインチキなこともやります。そのために編集者がいるのですが。

小説の真ん中あたりからこの修正作業が始まっていきます。これが大変厳しいです。人間にとって、一度築いたものをバラバラにほぐしてもう一度作り直すというのは大変難しいことです。ものすごいエネルギーが要ります。無から有を生じるよりもひょっとすると大きなエネルギーを使うかもしれません。もう出来ているのだけれども、それをいっぺん解体してバラバラにしてしまってもう一度組み立てるという過程は、どんな仕事にもあります。自動車を組み立てるにしても、時計の職人さんにしてもみな同じです。

例えば、非常に高級なスイスの機械式時計は、歯車一個から職人さんが自分で作りますが、彼らは完全に組み立ててから、完成品を一度バラバラにするのです。それには、ネジの締め具合を完璧なものにするためとか、いろいろ深い意味があるそうです。そうやって、数百個の歯車、ゼンマイ、竜頭といった部品を全部バラバラにしておいてもう一度締め直すのです。そうしないと

一個の手作りのスイスの高級時計というものは完成しません。それと同じことが小説で起きるのです。特に長編小説で起きます。37年間、小説を書いてきて、80作品を超えていると紹介がありましたが、全部そういう作業をやってきました。どの作品も最後には必ずこれをやらざるを得なくなります。

そうやって小説ができていって、ちょうどそろそろ佳境に入ってくるかなあというときにおもしろくないと感じるときがあります。しかし、そこで、おもしろいかおもしろくないかにとらわれて、おもしろくしてやろうとしたときには失敗します。そういうときにはむしろ、宮本輝という作家は自分自身の内側に、作家としてどんな哲学、どんな思想をもっているかということに戻っていきます。それは、コネクティング・ドッツの最初、つまり原点に戻るということなのです。

そしていよいよ最後に「起承転結」の「結」に入っていきます。小説の結びで何が嫌いかというと、「どうだ、うまいだろう」という文章が私はたまらなく嫌いです。皆さん方も小説をお読みになれば、自分が書けるかどうかは別にして、「この作家、ここでなんだか気持ちよく歌ってやがるなあ」とか、「安物の演歌みたいなありきたりなこぶしをきかせやがって」みたいに感じることがあるでしょう。そういうのが最後のあたりで目に見えてきます。「さあ終わりました」と言わんばかりに、派手なバック・グラウンド・ミュージックがダーンと鳴って「ジ・エンド」とたいそうな字幕が出るような、そんな小説は大嫌いです。

水の流れてたとえるなら、始まりも、突然水門が開いてどっと水が出てくるような始まり方ではなく、どこか山の奥の方からちょろちょろちょろと水が湧いてきて、それが何筋か集まってさらさらさらと小川になって、ふと気がつくと中ぐらいの川になり、さらにいつしか大河になり、この大河はどこまで続くのかなあと思ったら、いつの間にか黒海かどこかの河口へ消えていって、「あ、終わった」というような、そういう小説が私自身は非常に好きです。いかにも「うまいだろう、読ませてやったぞ、さあ終わるぞ」というような小説には絶対にしたくないのです。そうならないようにするため

に、また初めに戻ってどこかで流れを変えなければならないこともあります。その作業が最後に大きな課題として残ります。

「点」と「点」をつなげ続けゆく人生

「骸骨ビル」の庭」という小説は約4年間、『群像』に連載して終わりました。4年間、ずっとそんなことをやっているわけです。けれども4年間、「骸骨ビル」の連載だけでは息子たちを大学にも遣れませんので、同時に他の小説も書きます。「骸骨ビル」を書きながら「流転の海」を書き、それを書きながら毎日新聞に「三十光年の星たち」を書き、同時に別の雑誌で「三千枚の金貨」^{xi}を書くというような日々です。そんなことをもう37年もやってきました。それでも、もう何でも来いというふうにはなかなかならず、「小説書くのいややなあ」とか、「なんで小説家になんかなったんやろ」と思ったり、「朝の九時になんでこんなことしゃべってんのやろ」と思ったり（笑）、そういう状態で今65歳を迎えています。

そして、これから先に自分がこういう小説を書きたいと思うものを数えてみると、あと30ぐらいあります。その一作に4年かかると、私の身が持ちません。200歳ぐらいまで生きないといけなくなります。だから、あと20年書けるとしたら何作書けるだろうと思ひ巡らします。おそらく85歳になっても同じこのコネクティング・ドッツを続けているでしょう。自分の見たもの、聞いたもの、あるいは経験したこと、味わったこと、それらの「点」がこっちから出てきたり、あっちから出てきたり。それらの「点」をどうコネクトしていくかという作業をずっと続けていくだろうと思います。

そして、皆さん方が社会に出てから始まるのもみな同じことです。例えば、先ほども自動車販売のセールスマンの話をしましたが、今日もここでも断られた、ここでも門前払いされた、ここなんかもう塩まかれた、と。それで会社に帰ったら偉そうな上司に叱られ、あるときは夜遅くまで飲み会につきあわされ、というようなことがずっと続きます。なんでこんな目に遭うのかと

か、学生時代がどれほど有り難かったかと思うでしょう。これは誰の身にも起きます。自分には関係ないと思う人もいるかもしれませんが、そういう人ほど遭遇します。

このいろんな「点」が、あるときポコッとつながります。一度断られて、どうせまた行っても全然話も聞いてくれないだろうと思う人のことを、別のお得意先で、たまたま世間話のなかで話題にしたら、「それ、俺の後輩やがな、そしたら、ちょっと面倒見てやろうか」といって仲介してくれる、というようなことが起きます。だからとにかく「点」を作っておくことです。つなげようとして作るのではないのです。仕方なしにできていく「点」でよいのです。それでいいから、とにかくたくさん「点」を作ることです。動かなければ「点」は作れません。だからいろんな人と会う。嫌なやつともつきあう。それがすべて「点」になります。

世の中、嫌なやつの方が多いものです。社会に出たらよくわかります。100人の組織なら30人ぐらいは嫌なやつがいます。その30人が嫌だからと言って会社を辞めていたら、どこ会社でも三日勤まりません。辞めて自分が理想としていた会社に再就職できたとしても、そこには嫌なやつが、倍の60人に増えています。三回会社を変ったら90人が敵になっています。それは実は自分が敵を作っているのです。とにかく焦らずに粘り強く、やれと言われたことをこつこつとやる時期が10年は必要です。社会に出て10年間は、あいつが嫌いや、こいつが好きやとか、あの上司がアホや、しまいには社長がアホやとか、言わずに是非ともがんばっていただきたい。修行というものはそういうものなのです。

そんなときに思い出してください。一日に一枚、400字詰め原稿用紙にしこしこと文字を埋めて1000枚にする作業をやっているアホがおった、と。しかし、どんな道に進もうとも同じことです。いろんな「点」を作りにつけて、その「点」と「点」を自分で結んでいってください。これが小説家が小説を書く唯一の方法です、これ以外に他の方法は全くありません。あとは才能です。才能は自分では見つけられません。このいろんな「点」が皆さん方の

才能というものを見つけていくのです。これは巡り逢いですが、同時に一つの宿命でもあります。これが、私が37年間、小説を書いてきた結論です。何かのお役に立てば幸いです。（大拍手）

〔質疑応答〕

司会 今日宮本先生に質疑応答の時間を取っていただきました。貴重な機会ですから学生のみなさんは積極的に挙手をして、質問をしていただきたいと思います。

小説を書くことの喜び

男子学生 A 今日は素晴らしい講演を、本当にありがとうございました。ご講演の中で、文学を書く中でのさまざまな苦労話が多かったのですが、逆に歓喜の瞬間というようなものがありましたら、教えていただきたいのですが。

宮本 苦労話ばかりしてしまいましたね。ほとんど愚痴を聞いてもらったようなものです（笑）。嬉しいのは、やはり良い小説が書けたときです。それが良い小説かどうかは、書き始めから終わりまで全部読んでみないとわからないのですが、それでも書いていて感じる自分自身の手応えというものがあります。毎日書き続けながら、あるところからパタッと止まってしまって、「どう乗り越えようか」、「その次どう書き進めていこうか」と悩んでいた時に、「あ、そうだ。こう持っていこう」という形でスッと書けることがあります。そういうときに、自分が計算していなかったような表現や描写が自分の中からスッと出てくるのです。そのときに、「ああ、小説家になってよかったな」と思います。

もう一つは読者の反応です。一つの作品を仕上げて発表したあとに、いろんな方からお手紙いただいたり、直接感想を聞いたりしますけれども、やは

り「感動した」とか、「大きな希望を抱くことができた」とか、「宮本さんの小説を読んで、その小説と私が今直面している悩みというものは全然違うものだけでも、一つのヒントとして、自分の悩みをとて小さく感じられるようになった」とか、「それを乗り越えることができた」とか、そういうレスポンスをいただいたとき、本当に嬉しいですね。そのとき、自分が小説を書いていることに大きな意味があるなあと感じることができます。

それと本がたくさん売れたときも嬉しいです（笑）。

連載という過程

女子学生 B 作品を書いている最中に、佳境に近づいてくると、原点に立ち返って、またほどこいて結び直さなければならないと仰っていたのですが、連載をしていて、そこからまた戻って結び直すということはできるのでしょうか。

宮本 それはできません。ですから、一度とりあえず連載を終えてしまっって、そのあと、それが単行本になるときに、ゲラ校正というのがあります。そこで解体をするのです。その作業が大変だという意味です。ちょっと言葉足らずでしたね。

女子学生 B すると、単行本になってはじめて完成するということだと思いますが、最初から書き下ろしではなく、連載という過程を経ることにどういう意味を見出されていますか。

宮本 それは作家の資質ですね。連載は到底、プレッシャーが強くてできないという作家がたくさんいます。連載には締め切りがありますから、それに絶対に合わせなければなりません。特に新聞連載は毎朝です。もちろん、明日の朝の分を今晚書いているということはないし、多少のストックはあるものですが、それでもやはり連載中に自分が病気でもしたらどうしようとか、突然書けなくなったら連載が飛んじゃうじゃないとか、そういう恐怖があります。それは日刊の新聞だけでなく、週刊誌だろうが月刊誌だろうが同じ

です。だから連載は自分には無理だと言って引き受けない作者もいます。逆に私は締め切りがないと書けないです。それはコツコツと真面目にやる人間じゃないからです（笑）。追い詰められないと力が出てこない性格なんです。

今、生涯に一度だけ書き下ろしを書いてみませんかと編集者に言われているのですが、「うん」と言ったら引き受けなければいけないので、今のところ「う」までで止めています（笑）。これはそれぞれの作家の資質というか、得手不得手の問題です。

ありのままの人間を描く

女子学生 C 今回の先生のお話の中で、コネクティング・ドッツ（点と点をつなぐ）がキーワードとなっていたのですが、先生の小説は「人を美化する」ことがなく、人がもがいてもがいて、その中でどうやって生きていくのかというのを描いた作品が多いのですが、敢えてそういう「泥臭く」生きる人の姿を描くことが、先生にとっての「点」ということなののでしょうか。

宮本 冒頭に教授より「泥臭く生きる人の姿を描いている」との紹介がありました。私の考えは少し違います。なぜなら、私たち庶民は誰でもみなドロドロしています。一見、とてもおしゃれで洗練されているように見えても、実際の人生ではお金の心配をしたり、学生なら就職のことで悩んだり、主婦は子育てで苦勞し、お父さんはリストラに怯える、あるいは商売が倒産の危機に直面する――。私たちは誰もがまさにそういうドロドロの世界で生きているわけです。

だから私は、「泥臭い」人間を創作しているつもりはないのです。ありのままの人間の真実の姿を書こうとすれば、人間の汚い面、不幸な面、苦勞している面に触れざるを得ないのです。どんなに幸せそうな家庭でも、ひょっとしたら息子が曲がりかけていて、変な連中と付き合っていて、特殊なハーブでも吸っているんじゃないか、といった悩みを抱えているかもしれません。でもそれは玄関口ではわかりません。実際、その家のなかに入ってみなければ

わからないものです。

好きな文体

男子学生 D 宮本先生はどの作家の文体がお好きか、教えていただきたいです。

宮本 好きな作家はたくさんいます。ドストエフスキー、トルストイ、プーシキンなどもそうです。ただ、文体という観点から言うと、外国文学は翻訳者の文体になっていますから、この質問のお答えから翻訳ものは外すことにします。

日本の文学で私が好きな文体は挙げればきりがありませんが、今日は三つ挙げたいと思います。

まずは「平家物語」です。竹をスパッと切ったような言葉の運びにしびれます。「それよりしてぞ、平家の子孫は絶えにけり」という「断絶平家」の終わり方など、じつにすばらしいと思います。

二つめに山本周五郎さんの文体です。彼は時代小説作家と言われていますが、彼の名作の書き出しの数行というのはまねができないぐらい名文です。「虚空遍歴」という、端唄を唄う男を題材にした小説があります。端唄、長唄、清元と言えは江戸時代の音楽文化ですが、その中で端唄は非常に短い即興歌を指します。例えば、誰かが今詠んだばかりの五七五の句を、通りがかった端唄の流しに、家の二階から「おい、おまえ、俺が今作った句にちょっと曲をつけて歌ってみろよ」と言って歌わせるんです。それが気に入ったらお金を投げてやるというのが端唄の世界です。「虚空遍歴」はそういう流しの端唄から音楽の世界に入っていく男の話ですが、この書き出しが素晴らしいです。「あたしがあの方の端唄をはじめて聞いたのは十六の秋であった。逢いに行くときゃ足袋はいて——（後略）」と。

三つめは井上靖さんの文体です。私は井上靖さんの「あすなろ物語」を、家庭が貧しかった時代に親に隠れて押し入れの中で読みました。また、その

ころ読んだ井上さんの芥川賞受賞作の「闘牛」という文庫本には「比良のシャクナゲ」という短編小説も入っていたのですが、これも素晴らしい作品でした。それで、その時に初めて小説というものの素晴らしさを知り、そこから文学の世界にのめり込んでいきました。

井上靖さんの文章は非常に叙情的だと言われますが、いわゆる甘ったるい叙情ではなく、叙情の底にどこか怜悯なところ、冷たい氷のようなところがあります。その文章技法を理論的に分析しろと言われても、私にはできません。言語学者なら、この「てにをは」をこうしてとか、ここで本来使う形容詞を使わずに動詞を使ったからこうなったんだとか言いますが、小説家はそんなことを考えて書いてはいません。考えて作れるものではありません。井上靖さんの命からほとばしり出ているのです。文体というのはそういうものです。

人生の劇を演じる

男子学生 E 僕は今日のために「骸骨ビルの庭」ⁱⁱⁱを読んできました。そこに込められた宮本先生の深い思想と表現に深く感銘しました。作品の中に「劇を演じる」^{xii}という表現がありましたが、その表現を用いられた意図、真意について、ぜひお聞かせください。

宮本 これは難しい質問です。一言でこういう意味ですとは答えられません。

「劇を演じる」というのは、作品の中で茂木泰造と語り手の八木沢省三郎とのやりとりの中に出てくる言葉です。孤児たちが骸骨ビルの庭に畑を作って野菜を作ってきたわけです。そこに今まで全く土いじりをしたことのないヤギショウさんが「自分もいっぺんやってみよう」と思って、骸骨ビルの庭の畑で野菜を作り始めます。そのときに彼は、野菜の作り方について年長者の茂木泰造にだけでなく孤児たちにも教えを乞います。孤児たちは、子どものときからそこで畑を耕して野菜を作ってきて今はもう大人になっていますが、彼らが、「それは間違いだよ」、「そんなことしたらそのトマト枯れてし

まうよ」と言うと、ヤギショウさんは全く言われた通りにやります。それを見た茂木泰造が言う台詞です。

ここで片方は教えると言う劇を演じ、片方は教えられるという劇を演じています。もし片方が教えてくれているのに、「そんなこと教えてもらわなくてもわかっているよ」とか、「俺は俺のやり方でいく」と言ったら、片方だけの劇になって、教えられる劇は生まれませんね。それでは劇が成立しません。

例えば、ある人からひどく叱られたとします。それはただ単に、僕を憎くて怒っているんじゃないんだ、「叱る」という劇を演じているんだと受け止めるのです。そうすると、こちらも「叱られる」という劇を演じなければ劇が進んでいかないわけです。「人生は劇だ」というのはそういうことです。

今、親父はちょっと商売が傾きかけている、お母さんは病気だ、妹も何か辛いことがあるようだと、そういうことが割と重なって起こってくる場合があります。それは一つの大きな人生の転換という劇が始まっているのです。そこから逃げてしまったら劇は成立しません。そこでそれをすべて受け止めて、よし、じゃあお母さんの病気も治そう、親父の商売も俺が手伝ってやろう、妹の悩みも俺が役に立つかどうかは別にしてとにかく励ましてやろうと決める。そこで、一家を襲った一つの大きな災難という劇が一つ成立していきます。そうして初めてそこに新しいものが生まれていきます。

何もかもそういうふうを受け止めることが大事だということを全部書いてしまったら小説ではなくなります。だから、茂木泰造の「ヤギショウさんは教えられた通りにしはった」、「ヤギショウさんは偉い人や」、「ものを学ぶという劇を演じはった」という台詞を通して、劇を演じることの意味とそのことの大切さを表現しています。

人間にとって幸福とは何か

男子学生 F 先生がいろいろな苦勞をされてまで小説を書かれる目的は何で

しょうか。言い換えれば、先生が小説全体から伝えたい哲学とは何なのか、ということです。

宮本 私の小説を読んでもくださる方に私が伝えたいことは一つだけです。「人間にとって幸福とは何か」ということです。ただそれだけです。「泥の河」は私の処女作ですが、それから今書いている小説までこの37年間、自分の中でそのことは全く変わりません。

じゃあ幸福とは一体何なのかというと、それは人それぞれでいろいろな形の幸福があります。人間の愛情も、例えば、男女の愛情でも親子の愛情でも、一律に表せない多様なものがたくさんあります。言わば、幸福というものの機微です。それをいろんな小説でいろんな形で表していきたいのです。そして、やはり読んでもくださる方に希望とか勇気とかを与えられたらいいと思っています。

といっても、人間というのは小説でお説教されたくないものです。誰だって芸術でお説教されることぐらい腹が立つことはないでしょう。少なくとも私はそうです。だから、啓蒙するというようなものではなくて、小説という芸術の世界に浸っていただくなかで、自分にとって人生って何だろう、幸福って何だろう、自分はどう生きたらいいんだろう、ということを考えてもらえたらと思っています。そういうふうに思って小説家になったし、今も書き続けています。

男子学生F もう一つは質問というより感想ですが、作者の心理は決して国語の試験問題では絶対に汲み取れていないと前から思っていて、誰かからそのことを言葉で聞いたかったんです(笑)。それを今日は宮本先生から聞けて、本当にうれしく思っています。

宮本 国語というのはあくまでも学校の教科として勉強するものです。実際には小説家はあまりそういうことを考えてはいません。

今はだいぶ高齢になりましたけども、安岡章太郎さんという、戦後を代表する作家がいます。その方の「サアカスの馬」^{xxxx}という短編小説は名作です。ある高校が安岡さんの「サアカスの馬」から入試の出題をしたのです。主人

公の少年が、ぽつんと一頭にされてつながれているサアカスの馬の様子を見て、その馬が（まあいいや、どうだって）と、つぶやいているような気がした、という描写があるのですが、その「つぶやいている」に傍線が引いてあって、作者はなぜ「つぶやく」を漢字ではなくひらがなで書いたのか、それを説明せよという問題でした。模範解答は「少年の〈寂〉しさをより強く印象づけるために、あえて漢字ではなく、ひらがなで書いたのである」と記されていました。私は、そんな馬鹿な、と思いまして、そう思っていた矢先に東京で安岡さんとお会いしたんです。それで、その試験問題のことを安岡さんに話しました。「安岡さん、どうして『つぶやく』ってひらがなで書いたんですか」と訊いたら、キョトンとして、「僕、『呟』って漢字、嫌いなんだよ」と（爆笑）。結局、そういうものなんです。きっとひらがなが珍しいから特別な意図を読み取って問題にしたのでしょうね。国語の試験にはこういう問題がよく出ます。だからみんな国語が嫌いになるんです。

小説家となったきっかけ

男子学生 G 会社勤務を辞めて小説家になられたという紹介がありました。が、小説を書くためには会社を辞めざるを得なかったということでしょうか。

宮本 この話をすると長くなってしまいますが、少しだけ。私は大学を卒業して広告代理店に入り、コピーライターをやっていました。その後、25歳のときに突然重症のパニック障害になり、会社に行けなくなってしまいました。それで電車に乗れない、エレベーターに乗れない、会議に出られない、取引先と打ち合わせもできない、というような暗澹たる状態になりました。当時はまだ、パニック障害という病名もなく、自分がどうしてこんな病気に罹ったのかもわかりませんでした。なんとか自分で乗り切ろうとしたのですが、電車に乗れない男にはサラリーマンはできません。会社に行けないんですから。だから結局、会社を辞めるしかなかったんです。それで職を失った自分が家でもできることはないかと考えたときに、小説を書こうと思い立ったの

です。それが小説家となったきっかけです。

男子学生 G 全く書けないときのお話をされていましたが、僕にもそういうときがあります。そのときに宮本先生はどうされていますか。

宮本 もうしょっちゅうです。書けないときは本当に一行も書けないんです。ただ机の前に座っているだけで、時間だけどんどん経って行って、締め切りはどんどん迫ってくるわけです。でもそのときに大事なことは、たとえ一字でも書くのです。なんでもいいから次に続けていくのです。

例えば、非常にたくさんの貨物列車をつないだ機関車があるとします。これが停止の状態から最初にゴトンと動き出すときというのは、ものすごく大きい力を要します。けれども、動き出すと惰力がついて次第に軽くなっていきます。人間もそれと同じです。もうやりたくない。それでもとにかくやるんです。そうするとゴトンと機関車が動きます。そのことを 37 年間、ほとんど毎日やってきました。だから、行き詰ったときに大事なことは、あきらめないで動くことです。やりたくなかったら、やることです。それがコツです。

「螢川」に込めた思い

男子学生 H 私は「螢川」^{ix}を読ませていただいたのですが、生の苦しみと死の苦しみがある中で、最後の螢のシーンでひどく感動しました。宮本先生はどのようなお気持ちで「螢川」を書かれたのでしょうか。

宮本 「螢の明滅」は、やはり生と死というものをある程度シンボル化していることは間違いありません。ただ、あの小説で書き手として一番悩んだのは、あれだけの螢を本当に小説の中で最後に出していいものか、ということでした。「螢が出る」という言い伝えがまずあって、さて本当に螢が出るのだろうか、やはり出ないのだろうかなどと、みんなで言い合いながら見に行く——。普通、純文学ならそこで終わります。けれども私は、盛大に飛ばしたかったのです、螢を。そして、その光で人の形を作りたかった。生と死の明滅で人間の形を作りたかったのです。そのためには、どうしても螢に出て

もらわなければならなかったのです。

あの作品を書き終えてすぐ、ある蛍の研究会から手紙が来ました。嫌なところから来たと思いました(笑)。手紙を開いてみると、「私どもの研究会は、蛍を探して数十年、いまだかつてあのような蛍は見たことがございません。それで、この常願寺川から神通川へとつながるいち川のどこにあのような蛍が出るのか、その場所を教えていただければ、今年の田植えの頃にみんなで見に行きたいと思います」と書いてありました。困りました(笑)。嘘ですとは言にくいですから。でも、致し方なく正直な返事を書いて送りました。「それは私の心の中で飛んでいたのです。実際には、あのような蛍を、私は見たことがありません」と。そうしたら、それっきり返事はありませんでした(笑)。

司会 語らいは尽きませんが、残念ながら時間となりました。宮本先生、今日は「文学を生む力」を通して、私たちに生きる力を教えてくださったと思います。素晴らしい講演を本当にありがとうございました(大拍手)。

注(当学会編集部により作成)

- i コネクティング・ドッツ(connecting the dots, 点と点を繋げる) スタンフォード大学の2005年の卒業式で、米国アップル社の創始者、スティーブ・ジョブズ氏が講演した内容から取っている(同大学ウェブサイトで現在も公開されている)。

You can't connect the dots looking forward; you can only connect them looking backwards. So you have to trust that the dots will somehow connect in your future. You have to trust in something — your gut, destiny, life, karma, whatever. This approach has never let me down, and it has made all the difference in my life.

(将来を見ずして点と点をつないでおくことはできない。後から振り返ってはじめてつなぐことができる。だから将来何らかの形で点と点がつながると信じることだ。自分の直感、運命、人生、宿業、そのほか何であっても、その何かを頼りにして信じるのだ。このやり方で私が失敗したことは一度もなく、むしろこのやり方こそが私の人生に大きな違いをもたらした。)

- ii 「流転の海」 宮本輝氏の長編小説。「流転の海(第1部)」(1984年、福武書店刊)、「第

- 2部 地の星」(1992年, 以下, 新潮社刊), 「第3部 血脈の火」(1996年), 「第4部 天の夜曲」(2002年), 「第5部 花の回廊」(2007年), 「第6部 慈雨の音」(2011年) が刊行されている。「第7部 満月の夜」は文芸誌『新潮』に2012年1月号より連載中。
- iii 「骸骨ビルの庭」 宮本輝氏の長編小説。文芸誌『群像』連載(2006年～2009年)を経て, 2009年, 講談社より上下2冊刊。2010年, 第13回司馬遼太郎賞受賞。
 - iv 「ナニワ金融道」 青木雄二氏による漫画(1990年, 講談社刊)。テレビドラマ化, 映画化もされている。「追い込み」とは借金の取り立てのこと。
 - v 骸骨ビル 「骸骨ビルの庭(上)」の「平成六年二月二十一日 茂木泰造の話」に, 「骸骨ビルといいますのは, このビルを遠くから見ると, 屋上に何本もの物干し竿が突き出てまして, それがなんやしらん人間の骨みたいやったんですな」(上巻p.38より)とある。
 - vi シュボンターン 宮本輝氏の小説「愉楽の園」(1989年, 文藝春秋刊)の中で, このエピソードが使用されている。「シュボンターン……。語源はラテン語だが英語の辞書では, <無意識的な, 自発的な>という一見相反する訳がなされ, さらにこうつけくわえられていた。<考えたうえで行われたものでなく, 外部からの刺激に対して本能的になされた>」(p.202)。これに該当するラテン語語彙は形容詞のspontan(スボンターン)。これを起源とする形容詞が欧州各言語にある。シュボンターンの発音はドイツ語のspontanが最も近い。英語ではspontaneous(スポンテニアス), フランス語ではspontané(スポンタネ)。「意図せず自然と湧き起こる」というような意味だが, 日本語訳として一般に用いられている「自発的」は, 「能動的」の類義語でもあるため, 意図性を表現するものとの誤解を引き起こすので, 最善の訳とは言えない。
 - vii 戦争孤児, 戦災孤児 「骸骨ビルの庭(上)」(p.39～41)では, 戦災で親を失った「戦災孤児」だけでなく, 親が存命であっても親の育児放棄によって棄てられた「棄迷児」なども含めて, 戦争が原因で孤児となった子供の総称として「戦争孤児」を用いている。作品に登場する「骸骨ビルの住人」はむしろ棄迷児が多い。
 - viii 「泥の河」 宮本輝氏の小説。1977年に『文芸展望』(筑摩書房)誌上に発表され, 同年, 第13回太宰治賞を受賞。1978年, 同社刊『蜚川』に収録。
 - ix 「蜚川」 宮本輝氏の小説。1977年に『文芸展望』(筑摩書房)誌上に発表され, 翌1978年, 第78回芥川龍之介賞を受賞。同年, 同社刊。
 - x 「三十光年の星たち」 宮本輝氏の小説。2010年に毎日新聞紙上に連載され, 2011年, 同社刊。
 - xi 「三千枚の金貨」 宮本輝氏の小説。前半は2009年に『BRIO』(光文社)誌上に連載され, 後半の書き下ろしを含めて, 2010年, 同社刊。
 - xii 劇を演じる 「骸骨ビルの庭(下)」の「平成六年五月十日」における茂木泰造の台詞で用いられる表現。「劇を演じる, ということが大切なときがあります。それ

を馬鹿げたことと軽んじる人は、自分の目に見えるもの以外は信じられへんのです。自分の知恵や知識の外には出られへんのです」(下巻 p.208 より)、その少し後段に、「畑仕事をよう知ってるサクラやヒデトがヤギショウさんに教えた。教えられたヤギショウさんが教えられたとおりにやった。これもまた劇を演じるということです。教える、教えられる、という一瞬の劇です。劇が成立したから、この畑には豊かな実りがあることですやろ」(下巻 pp.208-209 より)とある。

- xiii 「サアカスの馬」 安岡章太郎氏の短編小説。1955年に刊行された短編集『青葉館』(河出書房)に所収。